健康・体力つくり実践研究校
研究報告

～夢中になって学び続ける子どもを求めて～

相模原市立東林小学校

これから相模原市立東林小学校の健康・体力実践研究校の研究報告を行います。

研究主題

「**夢中になって学び続ける子どもを求めて**」

本校では、研究主題を「夢中になって学び続ける子どもを求めて」とし、研究をスタートしました。
体育科の授業改善を行い、子どもが子どもらしく表現したり、「どうしたらもっとうまくできるのか」などと考えながら活動したりできるよう研究を進めました。
今回は2年間の研究の取り組みと成果や課題についてご報告いたします。

東林小学校の現状と課題

今年度のクラス数と児童数は資料の通り、全23学級、児童数651名です。
児童数も年々減少傾向にあり、決して大規模の学校ではありません。
学校の近くには、駅があり、周辺は住宅地に囲まれています。それが故に、大きな公園が少なく、思い切り体を動かすことができるのは、本校の校庭ぐらいです。
子どもの体力向上にとって、本校にやるべきことは、この立地からしても少なくないと考えます。

東林小学校の現状と課題

研究当初の現状と課題

・近隣の公園は、決まりやルールが多く、子どもが**思いきり体を動かして遊べない。**
・学校では、校庭で体を動かして**遊びを楽しむ姿**が見られる。
・放課後も校庭に遊びに来て、体を動かす子もいる。
・ボール運動が中心であり、遊具を使った遊びや鬼遊びなど**様々な運動**に取り組む意欲が少ない。

また近隣に公園はあるが、決まりやルールが多く、子どもたちが思い思いに体を動かして遊べる場所が少ないです。
しかし、学校生活では、体育科の学習を初め、休み時間に校庭で体を動かして遊びを楽しむ姿が見られます。
また、放課後は校庭を開放しているので、下校後に校庭で体を動かす子どもたちも少なくないです。
しかし、その遊んでいる姿に注目すると、研究当初はドッジボールなどのボール運動が目立ち、遊具を使った遊びや鬼遊びなど様々な運動に取り組む意欲は少ないように感じました。

さらに、本校では、多様な人や自然と共生できる豊かな社会を実現するために、未来を創り出す人材の育成をめざし、学校教育に取り組んでいます。
また、本校の研究においては体育科学習の特徴を活かし、体を動かすことなどを通して表現する力の育成に取り組んでいます。さらに、21世紀を担う子どもになくてはならない「論理的に思考できる力」の育成をめざしています。

研究の視点

1．子どもが子どもらしく遊べるように

2．体育科学習の研究を通した、「考えて表現する力」の育成

・子どもが表現したいと思える環境づくり
・課題解決を要する学習活動の転機
・体育科で培った力を活かす機会の設定

そこで、子どもが子どもらしく、遊びたい遊びを選んだり、友だちと遊んだりできる活動をめざしました。
昨年度まで取り組んできた「わくどきタイム」の取り組み方や内容などを見直し、子どもたちが思い思いにやりたいことや、好きな場や道具を選んで体を動かして遊べるようにしました。
また、体育科学習の研究を通して、体を動かすことの楽しさを味わいながら、「考えて表現する力」を育むことをめざしました。
子どもが表現したいと思える環境づくりや課題解決を要する学習活動を展開し、その方法の研究を、授業実践を通して進めていきました。
さらに、体育科で培った力を活かす機会として、ボランティア（本校では会社と称している）活動を設定しました。そこで、様々な会社活動を通して、考えて表現する力をさらに高めることにも取り組みました。

研究内容（概要）

1．子どもが夢中になって表現する授業づくり

（1）学習環境づくり

①教師がつくる環境

ア：子どもへの接し方

イ：体育科学習での場づくり

ウ：わくどきタイム

エ：外部講師による体育科学習

②子ども同士でつくる環境

（2）運動に苦手意識をもつ子どもの関心を高める

（3）学び方を学ばせる

（4）ゲームや競争を学習展開に取り入れる

以上のような現状や課題を踏まえ、研究の視点から、次のような研究内容で実践に取り組みました。
概要については、このあとのスライドで詳しくご説明いたします。

研究内容（概要）

2. 子どもが本気で考える授業づくり
   （1）身につけさせたい技能分析
   （2）思考のプロセス
   （3）振り返りで次の表現を自分で決める

以上のような現状や課題を踏まえ、研究の視点から、次のような研究内容で実践に取り組みました。
概要については、このあとのスライドで詳しくご説明いたします。

研究内容

1．子どもが夢中になって表現する授業づくり

①教師がつくる環境

ア：子どもへの接し方

・教師が役者になる

・子どもたちを笑顔にする

・活気ある学習の雰囲気をつくる

・表現したことを評価して価値づける

イ：体育科学習での場づくり

・「やってみたい」「これならやれそうだ」と思える場づくり

ここからは、研究内容について、くわしくご説明いたします。

まずは、体育科の授業改善で子どもの体力向上をめざしました。
授業づくりでは2つのことを大切に取り組みました。
その1つめは、「子どもが夢中になって表現する」ことです。では、どうすれば、子どもは夢中になって表現するようになるのでしょうか。
①教師がつくる環境
ア：子どもへの接し方
　まずは、教師が役者になり、子どもの心情が解放される雰囲気をつくることを大切に、授業づくりをしました。そして、どこでも笑顔で子どもと言葉を交わしたり、子どもが表現したことをオーバーリアクションでほめたりして学習の雰囲気をつくっていきました。また、握手やハイタッチで子どもと関わり、子どもを笑顔にすることで、自己を開放します。
　さらに、授業中の移動は駆け足など、教師も子どもと一緒に活動して活気ある学習の雰囲気をつくることを心がけ、授業を行いました。

イ：体育科学習での場づくり
　場づくりも大切にしました。特に、子どもが夢中になる場づくりを心がけました。教材や教具を活用し、子どもが「やってみたい」「これならや

れそうだ」と思える場づくりを大切にしました。また、様々な教具が置いてあると、「どんな運動がやれるのかな」と興味がわき、それだけで子どもが運動するきっかけとなりました。

研究内容

1．子どもが夢中になって表現する授業づくり

①教師がつくる環境

ウ：わくどきタイム

・月水金の朝休み　「わくどきタイム」

・プロによるダンスサークル

エ：外部講師による体育科学習

・SC相模原

・陸上クラブの外部講師

ウ：わくどきタイム

年間を通して、月水金の朝休みを「わくどきタイム」と称し、様々な運動遊びをする時間をつくりました。子どもが好きなドッジボールなどのボールゲームをはじめ、鬼ごっこやドロケイなど、追いかけたり逃げたりする遊び、鉄棒やジャングルジムなどを使っての遊び、竹馬や縄跳び、一輪車などを使っての遊びと幅広く活動できるようにして、子どもが自分で遊びを選んで遊べるようにしました。そこに教師が加わり、子どもと同じ遊びをして、子どもが自己を開放して運動を楽しめるようにしました。

また、外部講師にご協力いただき、一緒にダンスをして体を動かして表現活動遊びを行うことにも挑戦しました。

エ：外部講師による体育科学習

ホームタウンチームであるSC相模原の選手を招き、子どもたちに夢をもつ素晴らしさや夢の実現に向けて、今やっておくべきことなどについて話していただいたり、選手の方と一緒に運動したりする授業を実施しました。

また、６年生の連合運動会の取り組みでは、陸上運動クラブの外部講師を招き、技能指導を行っていただきました。

研究内容

１．子どもが夢中になって表現する授業づくり

②子ども同士がつくる環境

・駆け足での集合、移動

・言葉を交わしたり、握手やハイタッチを大切にした雰囲気づくり

・アクションとリアクション

↓

学級の雰囲気づくり

友だちとつながる力　　の育成

授業づくりでは、教師がつくり出す雰囲気（環境）だけでなく、子ども同士でもつくれるようにしました。
教師と同様、集合や移動は駆け足を行うようにしました。
また、子ども同士でのハイタッチや励ます言葉がけを学習中に行われるようにしました。
さらに、友だちが起こしたアクションに対して、必ずリアクションすることを大切にしました。

研究内容

１．子どもが夢中になって表現する授業づくり

（２）運動に苦手意識をもつ子どもの関心を高める

①関心を高めるステップ

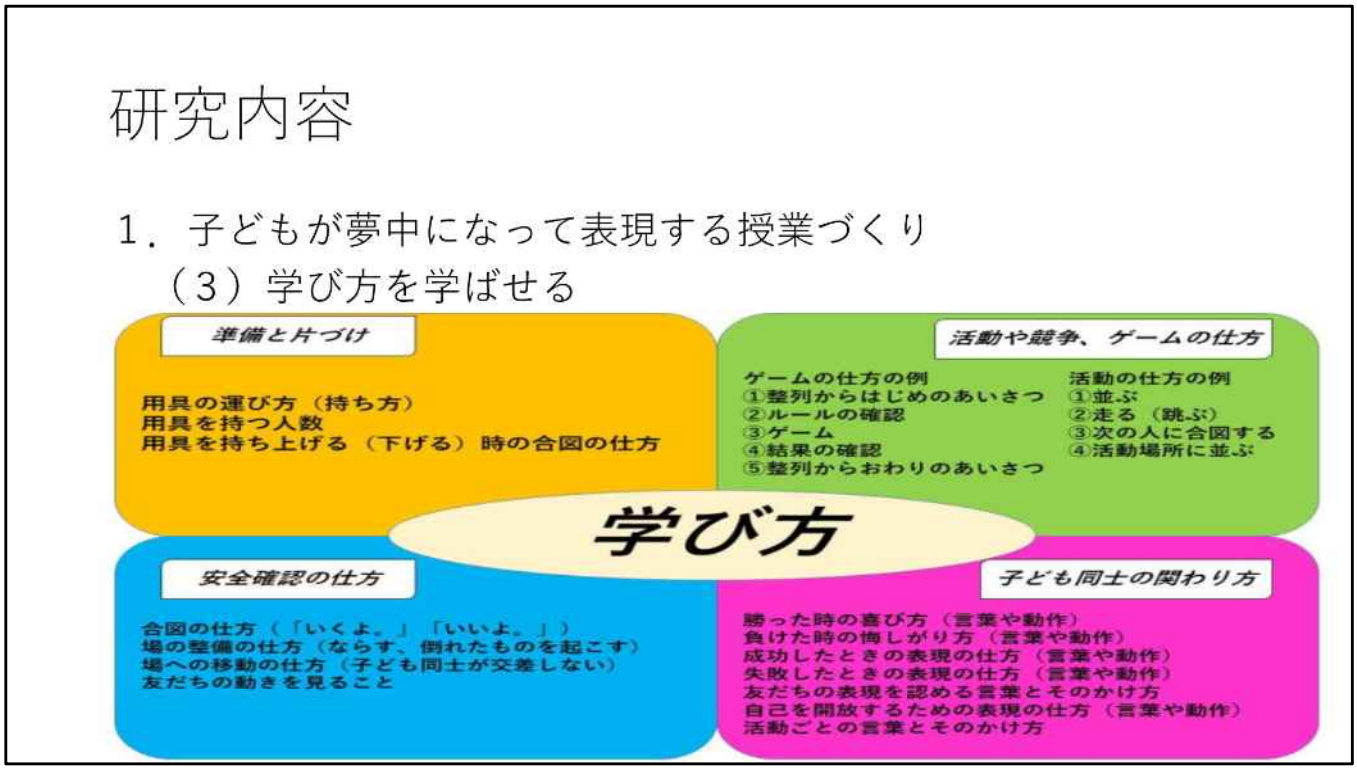
ステップ	内容	手立て
1	できるための見通しを持たせる やれるかな… ↓ やってみよう！	・単元のはじめにオリエンテーションを実施する。 ①単元を通して目指す姿を明確に示す。 ②単元の学習計画を示す。 ③毎時間のねらいを示す。 ④学び方を示す。 ⑤安全確認の仕方を示す。
2	できたを実感させる学習課題 何をしたらいいのか… ↓ やることが分かった！	・毎時間させたい動きを学習のはじめに図やイラストで示す。 ・毎時間めあての確認をする時間を確保する。
3	表現した姿を評価する これでいいのかな… ↓ やることが分かった！	・表現したその場で教師が評価する言葉をかける。 ・子どもに駆け寄り、ハイタッチ等をして、評価の言葉を伝える。 ・オーバーリアクションでほめる。

子どもが夢中になって表現できるようになるためには、学習の雰囲気だけでは難しいと考えます。
そこで、体を動かして表現することに苦手意識をもつ子どもについて考えることにしました。
苦手意識のある子どもには、運動することへの興味をわかせたり、関心を高めたりする必要があります。
そこで、これからどんな運動をするのか、オリエンテーションを行い、子どもが見通しを持てるようにしました。また、毎時間のめあてを具体的な行動目標で持たせました。少しでも表現したことを教師は評価する（褒める）ようにしました。これにより、「何をするのかな、苦手だな」と感じていた子どもの考えを「そうか、そのように体を動かせばよいのか」や「（教師に評価され）これでよかったのか。案外簡単だったな」と思えるようにしました。

研究内容

１．子どもが夢中になって表現する授業づくり
（２）運動に苦手意識をもつ子どもの関心を高める
③学びシートで振り返り
・企業連携した「学びシート」の活用

また、本校では、試験的に「学びシート」を活用しました。主に、6年生で活用しました。
「学びシート」とは、PC上で教師が作成した1日のスケジュールや体育科の学習の流れを子どもがサイトに自らアクセスして、その日のすべきことを知り（見通しを持つ）、自分の目標を立てたり、その活動を振り返ったりするものです。



学習の雰囲気と見通しで少しずつ表現することに抵抗を感じなくなっていきますが、本校で取り組んだのは、それだけではありません。
さらに、表現できるよう、「学び方」を学ばせることとしました。
学び方とは、次の4つを本校では示します。この4つを指導することで、子どもが指導されたことをもとに、次の行動を教師に頼らず、子ども自ら取り組めるようになります。

研究内容

１．子どもが夢中になって表現する授業づくり

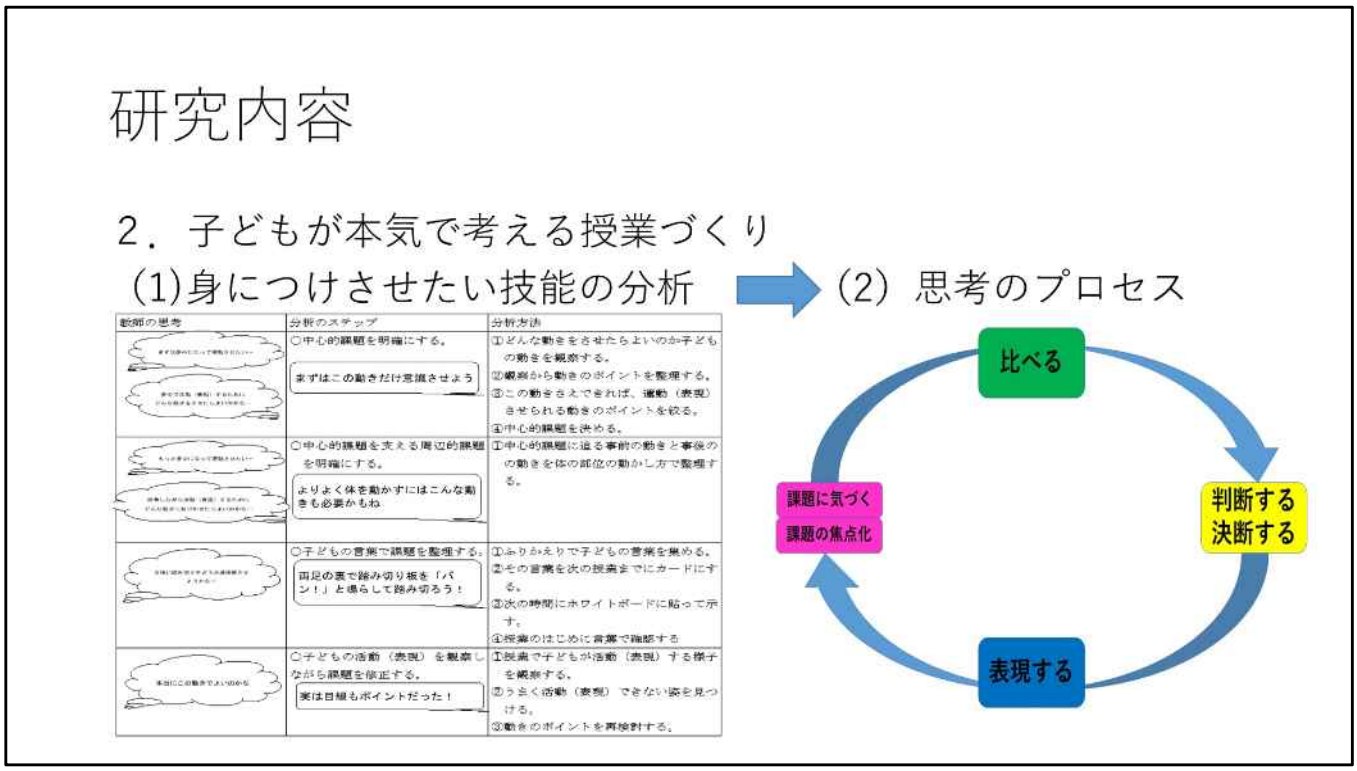
（４）ゲームや競争を学習展開に取り入れる。

※ゲームの系統表

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">低学年</th><th colspan="2">中学年</th><th colspan="2">高学年</th></tr>
<tr><th></th><th>１年生</th><th>２年生</th><th>３年生</th><th>４年生</th><th>５年生</th><th>６年生</th></tr>
<tr><td>ゲームの考え方</td><td colspan="2">○誰でも得点できるゲーム
○誰でも勝てるゲーム</td><td colspan="2">○競争の仕方を選べるゲーム
○負けてもリベンジできるゲーム</td><td colspan="2">○ゲームの仕方やルールをつくるゲーム</td></tr>
<tr><td rowspan="3">本気で勝敗にこだわるゲームをつくるためのポイント</td><td colspan="6">○ゲームが終わるまで勝敗が不確定であるゲームにすること
○負けが続くゲームにならないこと
○勝った時の喜び方と負けた時の悔しがり方を指導すること</td></tr>
<tr><td colspan="6">○必ず２回戦行えるゲームにすること</td></tr>
<tr><td colspan="2">○ゲームの仕方が簡単ですぐにやれるゲームにすること</td><td colspan="2">○ゲームの仕方を知り、その仕方を選べるようにすること
・リレー、タイム、ガランコ
・試技の順番（対戦相手）
・対戦する場</td><td colspan="2">○ゲームの仕方やルールを工夫できるゲームにすること
○自分の動きを変えることに意識を向かせられるゲームにすること</td></tr>
<tr><td>ゲームの進め方で必ずやること</td><td colspan="3">①整列
②あいさつ（はじめとおわり）
③握手とハイタッチ</td><td colspan="3">①整列
②あいさつ（はじめとおわり）
③ルールの確認
④勝敗の確認
⑤握手とハイタッチ</td></tr>
<tr><td>ゲーム内容の進化の過程</td><td colspan="6">①人数の進化（１対１　→　２対２　→　集団対集団）
②ゲームの仕方の進化（対戦方法を選べる、対戦相手を選べる、競争順を選べる）</td></tr>
</table>

学習の展開にもこだわりました。
学習の中心にゲーム（競争）を置くことで、本来子どもが持っている負けたくない気持ちを大切にしました。学年の実態に合わせて、ゲームの内容やルールを検討し、授業の中心に置き、指導しました。またこれは、学年でゲームを検討する際に各学年で大切にすることをまとめたものです。

以上、子どもが夢中になって体を動かす（表現する）ために、体育科の授業を通して取り組んだ内容です。



夢中になって体を動かすようになった子どもの意欲を継続させ、運動し続けるにはどうしたらよいのか。
それは、子どもが思考することに鍵があると考えました。そこで、次のようなプロセスで子どもが思考できるようにしました。
まず、思考するには、思考するための知識が必要であると考えました。そこで、「技能分析」と称し、子どもに何を知らせて、何を身につけさせることが思考につながるのかを検討し、授業するようにしました。そうすることで、子どもが自らの課題を明確に持つことができます。
課題が明確になったら、思考のプロセスを意識して教師が子どもの思考を支えます。子どもが表現したことを元に、子どもに「今の動きはどうだったのか」と投げかけ、次の動きを決め、活動できるようにしていきます。また、タブレット等で撮影した自らの動きを、友だちや手本の動きと比べ、次に意識する体を動かす方を決め、運動するようにしていきます。思考でも、表現すること（考えたことを試すこと）をしなければ、課題に対する自らの表現とのふりかえりができないことを指導し、子どもには、「考えたことを試す」ことを大切にしていきました。

研究内容

２．子どもが本気で考える授業づくり

（３）振り返りで次の表現を自分で決める

①授業終わりの振り返りで次の表現を決める。

・振り返りの視点

学習のねらいと子どもの姿を一致させること

次にどのような表現をしたらよいか明確にすること

子どもの言葉を整理すること

②授業中の思考を支える学習カード

活動の最後には振り返ることを大切に取り組みました。授業の最後にも振り返りを行い、子どもの思考が途切れないように、自分の動きがどうだったということだけでなく、次はどうするのかを決めることを心がけました。もちろん、学習カードで思考を支えることにも取り組みました。学習の最後だけでなく、学習中にも使用できるようにしたことで、活動中に自分の考えをメモするなど、考えを書き留められるようにしました。

研究の成果

①体育科の学習で見られた子どもの姿
　〇夢中になって運動する
　〇学び方を学ばせるための学習の進め方
　〇ともに学ぶ雰囲気

②体育の学習を活かした、学校生活で見られた子供の姿
　〇わくドキタイムでの子どもの姿

③ボランティア（会社）の活動で外遊び

授業を改善し始めてから、子どもの動きや表現する姿に変化が表れ始めました。
夢中になって運動する姿が見られました。ゲームに勝つことにこだわり、負けたときは悔しくて涙する子どもの姿も見られるようになりました。
また、学び方を学ばせるための学習の進め方を行ったことで、めあてをもって学習を進める姿が見られるようになりました。さらに、学び合う雰囲気もよくなり、子どもが互いに言葉をかけ合い、準備や片付けで自分の役割を果たす姿が見られるようになりました。また、自分の安全を確保するために、安全確認の合図をする姿が見られるようになりました。

わくどきタイムでの子どもの姿も変化していきました。
朝のわくどくタイムでは自己を解放し、とにかく運動する姿が見られました。天候や気温にかかわらず、現在は約98％以上の子どもが朝、外遊びを行っています。また、遊び内容もドッジボールに偏らず、ボール運動では、サッカーやバスケット、タグラグビーで体を動かす姿が見られるようになりました。ジャングルジムや鉄棒、雲梯などの用具を使った運動は一輪車やなわとびなどで体を動かす姿が見られました。さらに、鬼遊びはそのバリエーションを教師が増やすことで「今日は〇〇鬼をしよう。」と様々な鬼遊びで体を動かす姿が見られるようになりました。自分でやりたい遊びを決めたり、友

だちと「〇〇遊びをしよう」と互いに言葉をかけながら校庭で出る姿に子どもらしさを感じるようになりました。今では、雨などでわくどきタイムがないとき、その知らせを聞くと、「え～」と落胆する子どもの声がするほどになりました。

ボランティア活動では、レク会社が建てられました。主に、外遊びをすることが目的です。同じ学年だけでなく、「今日は1年生のみなさんとドロケイをします」と様々な学年とともに外遊びを楽しんでいます。

今後の課題

1. 外部との連携
2. 校内研究の進め方
3. 子どもの活躍の場をつくる

今後の課題として、外部との連携があります。本校では、昨年まで、様々な方に協力していただき、研究を進めてきました。しかし、新型コロナの影響で、積極的に外部と連携がとりづらくなってしまいました。しかし、子どもとの関わりができなくても、少人数における、職員同士の関わりを続け、来年度以降も研究が進められるようにしていきます。また、今年度1学期に思うように研究授業や研究協議会を進めることができませんでした。しかし、今年度の後半にかけて、授業研究を再開し、小グループでの研究協議会を持つようにしていきます。ボランティア（会社）の活動では、少しずつ異学年での活動も行えるようになりました。すると、すぐにレク会社が活動を始めるなど、子どもの意欲は高いと感じました。この気持ちを低下させないよう、感染症防止に対応していきながら、子どもが考えて表現する力を育んでいきます。

研究を支えた組織

今年度の
研究組織

研究主任　　：笹野
研究推進委員長：綾部

研究組織について

1. 各組織の主な活動内容

研究企画会・校長、副校長、教務主任、研究主任、各学年団選出の研究推進委員で組織する。
・研究目的を踏まえた研究の目標・研究の内容について、具体的な理論を構築する。
・構築した理論を授業改善に活かすための方法や手立てを提案する。

推進委員会・教務主任、研究主任、各学年選出の研究推進委員で組織する。
・各学年の研究の進捗状況について、報告と交流を図る。
・指導案検討および研究授業の準備計画を中心となり、研究を推進する。

研究全体会・研究目的を踏まえ、全職員が研究目標や内容について協議し研究を深める。
・研究授業や研修を通して、研究内容や授業の改善について検討する。

2. 組織図

最後に、子どもの健康・体力つくりを支えるこの研究が持続できるようにするには、研究組織を再編成する必要があると考えました。令和3年度の研究に向けて、全体会が行えない状況が発生しても、研究がストップしないよう、小グループを結成し、職員がその小グループのどこかに必ず所属し、研究を進めていけるようにしたいと考えます。

ご清聴ありがとうございました。

今後も体育科の授業を中心に研究を進めていきます。様々なところでご指導いただけると幸いです。ありがとうございました。